



平成24年度 第十六回 外国人留学生 奨学金受賞者紹介



熊本大学大学院医学教育部
修士課程一年(中国)
羅 カン

この度は、肥後医育振興会医学研究助成金を賜り、誠にありがとうございます。関係者の皆様から厚くお礼申し上げます。

私は、熊本大学大学院・医学教育部・知覚生理学分野の修士一年生の羅カンです。今、宋教授の指導下で、大脳皮質の聴覚野についての研究を行っています。聴覚野にはいくつかの領域があることが確認されていますが、私の研究のテーマとしては①その中のA1といわれる領域のLayer1の細胞と視床の内側膝状体との結合、また、A1内でもLayer1とその他のLayerの細胞の結合について調べること。そして、②最近、当教室で発見された聴覚野の一領域であるIAFの詳しい性質について調べることです。IAFは顆粒島皮質に存在していますが、その性質についてはまだ分かっていません。私は、このIAFの細胞自身の性質や、他の領野との結合についてパッチクランプを用いて調べています。



熊本大学大学院医学教育部
研究生(中国)
張 田力

私は中国からの留学生張田力です。こ

の度、肥後医育振興会の研究助成金をいただきました。誠にありがとうございます。

私は中国南昌で生まれ、小さい時から生命の不思議に興味があり、大学では医学を専攻しました。大学中に、時代に先駆け日本への留学の夢が一層強くなりました。

日本に来て約半年になりましたが、日本人の勤勉さ、仕事に対する真面目さ、努力などに強く印象づけられました。特に、教室の中の教授、指導教官そして他の研究者が一生懸命に働いていて、日本人の仕事量と効率を見てビックリしました。また、教室の教授が自ら実験をしていたのには感動しました。多くの人々が職位を問わず一生懸命頑張るのは成功社会の必要な条件だと感じました。

一方、日本の研究がなぜ一流になるのかの原因の一つは国際化だと思えます。今私の教室の大学院生には、タイ、インドネシア、エジプトや中国の留学生がいます。日本の研究者は具体的な人と人との競争ではなく、世界のアカデミックの潮流に追いつくことを目指しています。このような競争センスが一番いいと思います。

さらに、教室では毎日一回のミニディスカッションおよび週末の研究会には、教授を初めとし、教室全員が英語で発表質問、討論しています。この様な環境のなか、科研チーム中の初心者の方も受益深く、半年未満の学習からは大変収穫が多いです。

私の現在の研究テーマは「獲得免疫の分子機構」です。私は獲得免疫におけるこれらの遺伝子変化がゲノム遺伝子構成の上でどのようなメカニズムで制御されているのかについて研究したいと考え、その基礎的な発想と解析方法、技術の習

得の為に医学部免疫学分野の阪口薫雄教授の元で一年間研究生として学びたいと思います。その後、熊本大学大学院への進学を希望しています。

私費留学生としての私は、地域差の為生活費や授業料などが一番大きな障壁となつていますが、今度の助成金を頂いて本当に一時的に助けられました。もう一度会員の先生方に心より感謝申しあげます。



熊本大学大学院医学教育部
博士課程二年(中国)
馬 明杰

私は中国のハルビン市からの私費留学生馬明杰と申します。この度、肥後医育振興会医学国際交流助成金をいただきました。誠にありがとうございます。

中国で病院に勤務する時に、自分の知識不足を実感しました。日本の医学技術は世界で有名であり、二〇一〇年の秋より熊本大学大学院博士課程に入学しました。

現在は、生体機能薬理学分野の光山教授の指導下で、脳卒中について研究を行っています。具体的には、ラットを用いて脳卒中モデルを作製し、薬剤による脳梗塞の縮小効果について、分子生物学的に研究を行っています。詳細な分子機能的に検討しており、データをまとめております。また、二〇一二年四月、十一月に日本脳卒中学会で発表を行うなど、精力的に研究活動を行っております。

私費留学生である私にとって、生活費や授業料など、いろんな経済的な困難があります。今度の助成金をいただきました。これは経済的に助けられました。この助成金にも助けられました。ただでなく、精神的にも助けられました。これから精一杯努力して、この分野で先端な医学を勉強したいと思えます。

多くの方々にご支援を頂いたことを心から感謝しています。どうもありがとうございました。



熊本大学大学院医学教育部
博士課程二年(中国)
郭 建工

この度は、肥後医育振興会医学研究助成金を賜り、誠に有難うございました。関係者の皆様方に心より厚く御礼申し上げます。

私は現在、低酸素環境と炎症との関係及びその意義を解明することを目的として検討を行っています。グリオブラストーマは神経腫の中でも最も悪性度の腫瘍であります。そして特定の細胞集団の治療抵抗性が大きな問題となつております。低酸素環境の存在は、臨床的に治療抵抗性、再発、不良な予後と関連することが知られています。また、炎症性微小環境はがんの発生、進展を促進するといふことが広く知られています。このようにして癌に関連した炎症性微小環境が構築されており、治療抵抗性を含めた様々な悪性形質に付与することが知られておりますが、低酸素環境と炎症応答との関係についてはよく分かっていません。これから、低酸素誘導性の炎症の悪循環、鍵となる遺伝子 Cytindomatosis (CYLD) の低下が転帰に関与しているのかどうかを検討することを進めております。今回の助成金をいただきました。本当に助かりました。将来は日本で学んだ知識や研究方法をもとに、中国の患者の診療そして世界の進歩に貢献できるように一生懸命努力したいと思えます。

最後に、選考にあられた先生方、またご推薦いただいた熊大病院神経内科安東由喜雄教授に深く感謝の意を表したいと思えます。